

長谷川 望 牧師

* 「神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠を与えられた。しかし人は、神が行うみわざの始まりから終わりまでを見極めることができない。」（伝道者の書3：11）

伝道者の書は「空の空、すべては空」で始まる。人生は空しいものだという。しかし、実はその空しさは神の存在と働きを認めないところから来ることがわかる。自然の営みも人間の営みもすべて神様が背後で動かしておられるのだ。それゆえ、すべてのことに神の時があり、神のなさることは時にかなって、調和がとれていて美しいのである。

また、「神は、人の心に永遠を与えた」。永遠は神様の専売特許であるはずだが、人間にも永遠への希望が与えられている。2千年前にイエス・キリストが来られて、十字架と復活で永遠のいのちがはっきりと示されたのである。私たちの肉体が生きるのは神様からすればほんの僅かな時である。だから神の計画とわざを知りうるのも僅かである。

* 「私は知った。人は生きている間に喜び楽しむほか、何も良いことがないのを。また、人がみな食べたり飲んだりして、すべての労苦の中に幸せを見出すことも、神の賜物であることを。」（3：12～13）

また空しさが湧き出してくるので、せめて生きている間は存分に楽しもうではないか、と。それは悪いことではないし、そうさせてくださるのも神様からの恵みではないか、という。

* 「私は、神がなさることはすべて、永遠に変わらないことを知った。それに何かをつけ加えることも、それから何かを取り去ることもできない。人が神の御前で恐れるようになるため、神はそうようにされたのだ。」（3：14）人生において、あそこでこうだったら、今はこうなのになどとつぶやくことがあるだろう。しかし、すべて、それらすべてのことは神がされたのだから、人がそれをとやかく言うことはできない。神のわざは完全なのである。古河教会は創立67年。その歴史の中で生まれ、育ち、召されていった人たちとその家族を偲ぶとき、神を恐れ、神を崇めたい。